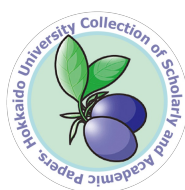




|                  |                                                                                             |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | アイヌ語千歳方言におけるわたり音化とわたり音挿入について                                                                |
| Author(s)        | 佐藤, 知己                                                                                      |
| Citation         | 北海道大学文学研究院紀要, 163, 23(左)-43(左)                                                              |
| Issue Date       | 2021-03-31                                                                                  |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/bfhhs.163.l23">https://doi.org/10.14943/bfhhs.163.l23</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/80814">https://hdl.handle.net/2115/80814</a>           |
| Type             | departmental bulletin paper                                                                 |
| File Information | 1002_bfhhs_163_l23.pdf                                                                      |



## アイヌ語千歳方言における わたり音化とわたり音挿入について<sup>1</sup>

佐 藤 知 己

### 1. はじめに

筆者は既に Sato (2003) においてアイヌ語千歳方言におけるわたり音が関係する音韻現象を論じているが、その後に得られた知見を多少加えて、この問題を再考してみることにしたい<sup>2</sup>。そして、この問題が、アイヌ語の音韻体系に関して当初考えていた以上に重要な意味を持つものであることを、基本的な実例を通じて説明し、今後のさらなる研究の必要性を示したいと思う。

### 2. 千歳方言におけるわたり音の関係する音韻現象

以下では、千歳方言の「わたり音」に関連する音韻現象を実例を用いて説

---

<sup>1</sup> 以下で「アイヌ語」という場合、特に断らない限りは、筆者が調査した千歳方言に限定して述べているという点に注意されたい。他方言では関連の音韻現象は異なる扱いを受けることが多い。なお、アイヌ語のデータは千歳方言話者白沢ナベ氏からご教示いただいたものである。ここにお名前を記して感謝の意を表したい。

<sup>2</sup> ここで筆者の関心はアイヌ語の事実の記述的解釈にあり、その過程で、どうしても必要があって、最新理論に多少言及することはあったとしても、その応用や有効性の証明そのものを目的とするものではない、ということを初めにお断りしておきたい。また、特にアイヌ語研究の場合、先学のあまりの偉大さが原因で、「同じことが先行研究に既に書かれている」と指摘されることも多い。しかし、どうか、本当に「同じこと」かどうか、よくご確認の上ご指摘いただきたいと思います。

明していく。ただし、そのすべてをもれなく記述することに主眼があるのではなくて、いくつかの規則が緊密に関連しあって一つの体系的な特徴を示している、ということ为例証することが主目的である、ということをご理解いただきたいと思う。そのため、挙げてある例は規則の理解に便な、できるだけ簡便なものに限定してあることを了とされたい。

## 2.1. わたり音挿入

まず、「わたり音挿入」であるが、y が挿入される「y わたり音挿入」と、w が挿入される「w わたり音挿入」の場合とがある。煩雑さを避けるため、以下ではそれぞれ単に「y 挿入」、「w 挿入」と称することにする。

### 1) y 挿入：

#### (1) \*i-omare<sup>3</sup>

不定-入れる

「ものを入れる（＝「酒をつぐ」）

上の例では、不定接辞 i-「もの、誰か」に o が後続しているが、\*io という母音連続はそのままでは実現できず、y が挿入される。母音（ただし i 以外）が後続する場合も同様である<sup>4</sup>。

#### (2) i-y-omare

不定 -y- 入れる

「酒をつぐ」

同様に、相互接辞 u-「互い」に e が後続する場合、\*ue という母音連続は避

<sup>3</sup> 使用した略号：1 = 1 人称, 単 = 単数, 相互 = 相互接頭辞, 不定 = 不定接頭辞

<sup>4</sup> i が後続する場合は喉音音素<sup>7</sup>が挿入される。例：i'iyomarka 「かわいらしい」。しかし、例は多くはない。なお、y が挿入されるのは、基本的には不定接辞 i- の後のみである。

けられて uwe となる<sup>5</sup>。

## 2) w 挿入：

### (3) \*u-e-peker

互い-について-明らかである

「～について互いに明らかである（＝物語る）」

### (4) u-w-e-peker

互い -w- について-明らかである

「～について互いに明らかである（＝物語る）」

以上から、概略的に言って、アイヌ語には i+ 母音 (i を除く), u+ 母音 (u を除く) という連続が生じる可能性がある場合、i+y+ 母音, u+w+ 母音, ように、y や w のような「わたり音」を挿入して母音連続を避けているとみられる現象のあることがわかる。ただし、後述するように、音韻的条件で機械的に起きる現象ではなく、不定接辞 i, 相互接辞 u- のような特定の形式の場合にのみ起きる現象であり、生起する条件について注意が必要である。

## 3) ' 挿入：

母音連続を避けるために喉音音素' (音声学的には声門閉鎖音 [ʔ] で実現されることが多い) が挿入されることがある<sup>6</sup>。出現の条件は厳密には多様であるが、ここでは議論の主眼ではないので詳しくは述べない。他に特別な条

<sup>5</sup> i-「もの、人」の場合同様、一般に u-「互い」という派生接辞に母音が後続する場合にのみ w が挿入される。

<sup>6</sup> 喉音音素' は服部 (1964, 1967) などにその仮定の理論的根拠が述べられ、母音で始まる音節は立てずに、すべて初頭に喉音音素を立てる分析が採用されているが、佐藤 (2015: 6) では、すべての音韻レベルでこの音素を仮定することはアイヌ語の音韻記述の上で不利を招く場合があるので、最終的な音韻レベルでのみ挿入されると考えるべきではないか、という仮説を述べている。本稿では特に必要な場合を除き、表記を省略する。

件のない場合に選択される選択肢であると言って良い。

(5) \*ko-onkami

に向かって-礼拝する

「～に向かって礼拝する」

(6) ko-'onkami

に向かって -'- 礼拝する

「～に向かって礼拝する」

## 2.2. わたり音化

アイヌ語には、「わたり音挿入」のほかに、母音 i, u が特定の環境でわたり音 y, w にそれぞれ交替する現象がある。

### 4) y わたり音化：

母音間で i が y に交替する場合がある。

(7) \*ku-i-omare

1 単主格-不定-入れる

「私がものを入れる (=私が酒をつぐ)」

(8) ku-y-omare

1 単主格-不定-入れる

「私がものを入れる (=私が酒をつぐ)」

(9) \*ko-i-omare

に対して-不定-入れる

「～にもものを入れる (=～に酒をつぐ)」

(10) \*ko-y-omare

に対して-不定-入れる

「～にもものを入れる（＝～に酒をつぐ）」

また、「母音+i+子音」という環境では特別な事情がない限り i は y に交替する

(11) \*ku-i-ruska

1 単主格-不定-怒る

「私がものに怒る（＝私が腹を立てる）」

(12) ku-y-ruska

1 単主格-不定-怒る

「私がものに怒る（＝私が腹を立てる）」

5) 母音間であるにもかかわらず、i の y わたり音化が起こらず、その代わりに y 挿入が起こる場合：

(13) \*ku-ko-i-omare

1 単主格-に向かって-不定-入れる

「私が～に向かってものを入れる（＝私が～に酒をつぐ）」

(14) ku-ko-y-y-omare<sup>7</sup>

1 単主格-に向かって-不定-y- 入れる

「私が～に向かってものを入れる（＝私が～に酒をつぐ）」

6) w わたり音化：

母音間で u が w に交替する場合がある。

---

<sup>7</sup> 語中では Vi→Vy (V は i を除く) は随意的のようである。要検討。ただし、表ではわたり音化を義務的に起きるものとして表示してある。

(15) \*ku-u-epeker

1 単主格-互い-について明らかである

「私が～について互いについて明らかである（＝私が物語る）」

(16) ku-w-epeker

1 単主格-互い-について明らかである 「私が・互いに・ついて明らかである（＝私が物語る）」

「私が～について互いについて明らかである（＝私が物語る）」

(17) \*ko-u-epeker

に対して-互い-ついて明らかである

「～に対して互いについて明らかである（＝～に物語る）」

(18) ko-w-epeker

に対して-互い-ついて明らかである

「～に対して互いについて明らかである（＝～に物語る）」

また、「母音+u+子音」という環境では u が w にわたり音化する<sup>8</sup>。

(19) \*u-ko-utur

互い-に向かって-間

「～の間」

(20) u-ko-wtur

互い-に向かって-間

「～の間」

---

<sup>8</sup> 特に o-u-C という連続の場合、o'uC のように記述するのが適切と思われる場合もあり、なお検討が必要である。

7) 母音間であるにもかかわらず u の w わたり音化が起こらず w 挿入が起こる場合：

(21) \*ku-ko-u-epeker

1 単主格-に対して-互い-について明らかである

「私が～に対して互いについて明らかである（＝私が～に物語る）」

(22) ku-ko-'u-w-epeker<sup>9</sup>

1 単主格-に対して-互い-について明らかである

「私が～に対して互いについて明らかである（＝私が～に物語る）」

2.3. その他の関連規則

8) u 削除：

1 人称単数主格接辞 ku- の場合は母音が後続しても w 挿入は起こらず，u の削除が起こる。

(23) \*ku-omare

1 単主格-入れる

「私が入れる」

(24) k-ómare

1 単主格-入れる

「私が入れる」

9) 再音節化 resyllabification：

(25) pet 「川」, 'etok 「先頭」

---

<sup>9</sup> ku-ko-w-w-epeker のような形も現れるが、例数が少なく、判断も難しい。今後の課題としたい。

(26) pet-etok (アクセントは petétok となる)

川-先頭

「川の水源」

単語の内部に C'V という連続が生ずることは一般にアイヌ語では許されていない。音節末の t と語幹の e が結合して音節が形成される。この場合、pet-etok は「水源」という意味の合成語（単語）であるので、\*pet'-etok とはならない。

1) から 8) までは、第一義的かどうかは別として、母音の連続 (hiatus) を回避する効果を持つ、という共通の特徴がある。また、「わたり音挿入」、「わたり音化」という規則の細かな分化には、アクセントが深く関与している(後述)。また、9) は一見、他と孤立した規則に見えるが、アクセント付与にかかわる「韻脚 (foot)」の形成に深くかかわる規則である。以下では、これらの規則がどのように組み合わせられてアイヌ語の語の音韻的外形が決定されるのかを具体的に見ていくことにする。

### 3. 最適性理論による記述の整理の試み

これまで見てきたアイヌ語千歳方言の「わたり音挿入」、「わたり音化」の現象と関連規則から、これらが「母音連続」の回避と深い関わりのあることが見てとれる。しかしながら、今度は、「母音連続の回避」という同一の目的を果たすために、なぜ複数の規則をわざわざ必要とするのか、という疑問が生じてくる。理論的にはいくつかの可能性があり、どの形もアイヌ語の音韻的形として不可能ではないと思われるのに、実際にはそれらのうち、特定のものしか適格でない、という事態をどう説明すればよいか、ということが問題となるわけである。このように、あり得る複数の可能性のうち、適性なものを選択する、という課題の処理は、近年、個別言語への応用が盛んである最適性理論 (Optimality Theory) の枠組でよく議論されているものである。

以下では、ごく初歩的なレベルではあるが、最適性理論の観点を導入してアイヌ語の、問題となっている諸規則の相互関係を整理してみることにする。

### 3.1. 基本的制約の仮定

まず、基本的制約 (constraint) であるが (プリンス・スモレンスキー 2008 : 6, 西原・那須川 2005 : 217-221), 入力をそのまま保持することにかかわる「照合性制約 faithfulness constraints」としては以下の二つが設定される。

照合性制約 (faithfulness constraints) :

- a. DEP (DEPENDENCE) : 付加の禁止
- b. MAX (MAXIMALITY) : 削除の禁止

アイヌ語の場合、MAX の中に、母音の削除だけでなく、母音のわたり音化 (弱化) も含めて考えることにする。

また、出力の適格性を条件付ける「有標性制約 markedness constraints」としては、以下のものを設定することにする<sup>10</sup>。

有標性制約 markedness constraints :

- c. NO HIATUS (母音連続禁止)  
1), 2), 3), 4), 5), 6), 7), 8)。すべて母音連続を避ける機能。
- d. NO {I/U-} V  
形態素 i-, u- に関して, i'V, u'V は通常許されない。1), 2) を参照。

---

<sup>10</sup> 狭母音が非狭母音と比較すると、それ自体が音声学的に子音の性質 (接近音) を持っているために非狭母音とは異なり、音韻論的にも子音としての扱いを受けやすい、ということ、また、そのような取り扱いがある特定の接辞にのみ見られる、ということは決してアイヌ語だけに見られる現象ではないと思われるが、とりあえずアイヌ語をもとに仮説的に立てたものである。もっと一般的な形に置き換えられないかどうか、今後さらに検討して行きたいと考えている。

e. NO C ' V (子音の後での喉音音素 ' の出現の禁止)

9) を参照。

f. NO VI/UC (特定の母音の後かつ子音 [ただし喉音音素は除いて考える] の前での i, u の出現の禁止)

4), 6) を参照。

以上の制約を基に、まず、「1) y 挿入」の現象を見てみることにする。例えば、\*i-omare→iyomare という交替のプロセスは以下のように記述できる<sup>11</sup>。

正しい選択の例：i-omare→iyomare

| i-omare                                                                                     | NO HIATUS | NO I/U- ' V | DEP | MAX |
|---------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|-------------|-----|-----|
| i-omare                                                                                     | *!        |             |     |     |
| i'-omare                                                                                    |           | *           | *   |     |
|  i-y-omare |           |             | *   |     |

\*i-omare は高い階層にある有標性制約 NO HIATUS を破っているので即座に候補からはずれる。次に \*i'-omare は、NO HIATUS という有標性制約は破っていないものの、形態素 i- のあとに 'V という連続が続かない、という有標性制約 NO I/U- ' V を破っている。また、この連続は、入力にない喉音音素 ' を挿入している、という点で照合性制約 DEP を破っている。最後に、i-y-omare は、NO HIATUS, NO I/U- ' V のいずれの有標性制約も破っていないが、y が挿入されるので照合性制約 DEP を破っている。これらの結果、相対的にもっとも違反度が低い i-y-omare が正しい形として選択される。

<sup>11</sup> 必要な場合、実際には現れない基底的な形に \* を付すことがあるが、誤解がないと思われる場合はいちいち付けない場合もあることを承知されたい。また、\* は予測と異なる形にも付すことがある。

次に、「4) y わたり音化」をみることにする。 $*ku-i-omare \rightarrow ku-y-omare$ という交替のプロセスは次のように記述できる。

正しい選択の例： $ku-i-omare \rightarrow ku-y-omare$

| ku-i-omare                   | NO<br>HIATUS | NO<br>I/U- ' V | NO<br>C ' V | NO<br>VI/U C | DEP | MAX |
|------------------------------|--------------|----------------|-------------|--------------|-----|-----|
| ku-i-omare                   | *!           |                |             |              |     |     |
| ku-'i'-<br>omare             |              | *              |             |              | *   |     |
| ku-y-'-<br>omare             |              |                | *           |              | *   | *   |
| ku-'i-y-<br>omare            |              | *              |             | *            | *   |     |
| ku-y-y-<br>omare             |              |                |             |              | *   | *   |
| <del>ku</del> ku-y-<br>omare |              |                |             |              |     | *   |

(複数回違反している場合でも\*で示してある。)

$*ku-i-omare$  は、高い階層に位置する有標性制約 NO HIATUS を破っているので即座に不適格となる。次に、 $*ku-'i'-omare$  は、有標性制約 NO I/U- ' V を破っている<sup>12</sup>。また、喉音音素 ' の挿入により、照合性制約 DEP も破っている。 $*ku-y-'-omare$  は、有標性制約 NO C ' V を破っており、喉音音素 ' の挿入により、照合性制約 DEP も破っている。さらに、i が y に弱化しているので、照合性制約 MAX にも違反している。 $*ku-'i-y-omare$  は、有標性制約 NO I/U- ' V, NO VI/U C に違反し、喉音音素 ' の挿入により、照合性制約

<sup>12</sup> NO I/U- ' V という有標性制約は i, u という形をした派生接頭辞にかかわるものだが、1 人称単数接頭辞 ku- にも適用される、とここでは考えておく。あるいはもっと一般的な制約に修正できる可能性があるが、ここではこれ以上触れない。

DEP も破っている。*\*ku-y-y-omare* は、有標性制約は破っていない代わりに、*y* 挿入により照合性制約 DEP に違反し、*i* が *y* に弱化（わたり音化）しているので、照合性制約 MAX にも違反している。結局のところ、*i* が *y* に弱化し、照合性制約 MAX には違反しているが、他に違反のない *ku-y-omare* が選択される、と説明される。

以上から、最適性理論がアイヌ語のわたり音挿入、わたり音化現象がかかわる音韻現象の適切な記述に有効であることがわかる。もっとも、以上の枠組では適切な記述ができない事例も存在する。すなわち、上記 5) の、(13)、(14) で示した例である。母音間であるにもかかわらず、*i* の *y* わたり音化が起こらず、その代わりに *y* 挿入が起こる。

誤った選択の例：*ku-ko-i-omare* → *\*ku-ko-y-omare*

| ku-ko-i-omare             | NO<br>HIATUS | NO<br>I/U- ' V | NO<br>C ' V | NO<br>VI/U C | DEP | MAX |
|---------------------------|--------------|----------------|-------------|--------------|-----|-----|
| ku-ko-i-omare             | *!           |                |             |              |     |     |
| ku-ko-'i'-o-omare         |              | *              |             |              | *   |     |
| ku-ko-y-'o-omare          |              |                | *           |              | *   | *   |
| ku-ko-y-y-omare           |              |                |             |              | *   | *   |
| ku-ko-'i-y-omare          |              |                |             | *            | *   |     |
| <del>ku-ko-y-</del> omare |              |                |             |              |     | *   |

(実際には *ku-ko-y-y-omare* が選択される<sup>13)</sup>)

*\*ku-ko-i-omare* は、高い階層に位置する有標性制約 NO HIATUS を破って

<sup>13</sup> 実際には、*ku-ko-'i-y-omare* も現れるようであり、事態はそう単純ではないが、DEP に

いるので即座に不適格となる。次に、\*ku-ko-i'omare は、有標性制約 NO I/U-'V を破っている。また、喉音音素'の挿入により、照合性制約 DEP も破っている。\*ku-ko-y-'omare は、有標性制約 NO C'V を破っており、喉音音素'の挿入により、照合性制約 DEP も破っている。\*ku-ko-y-y-omare は、有標性制約は破っていないが、わたり音 y の挿入により、照合性制約 DEP を破っている。また、i がわたり音化によって y となっているので、照合性制約 MAX も破っている。\*ku-ko-i'y-omare は、有標性制約 NO VI/U C を破っており、喉音音素'、わたり音 y の挿入により、照合性制約 DEP を破っている。これに対し、ku-ko-y-omare は、挿入がないため、照合性制約 DEP を破っておらず、違反は i が y にわたり音化して弱化する照合性制約 MAX の違反のみであるので、最終的にこの形が選択される、「はずである」が、実際には ku-ko-y-y-omare が選択される。このような不備の原因について次に見て行くことにする。

### 3.2. 韻律的要因の重要性

前節で指摘した選択の誤りの原因は何だろうか。実は、この現象の理解にはアクセントの考察が重要である<sup>14</sup>。ただし、問題の本質的解決には、アクセントの有無や位置の問題の指摘だけでは不十分なのであり、韻脚 (foot) に関する体系的な考察こそが重要なのである、ということを強調しておきたい。理解の便のため、再度、要点を繰り返すと、「\*ku-i-omare→ku-y-omare のような i のわたり音化が、\*ku-ko-i-omare→ku-ko-y-y-omare ではなぜ起こらないのか」ということに帰着する。最後にこの点について若干の考察を述べる。

まず、当該の問題に直接関連するアイヌ語のアクセント規則のみを簡潔にまとめると以下のようである。

---

違反している、という点では同等であり、ku-ko-y-y-omare と近い位置付けにある可能性がある。議論を必要以上に複雑にするのでここではこれ以上触れない。今後の課題としたい。

<sup>14</sup> \*ku-ko-y-omare のような例が生じないこと、すなわち、i のわたり音化が生じない条件がアクセントの位置であることを初めて正しく指摘したのは白石 (1998) である。

i) アイヌ語の単語アクセントは原則（例外あり）<sup>15</sup>、単語の第一音節か第二音節にしか立たないので、第三音節以降のアクセントは最終的には顕在化しないままとなる。

ii) アイヌ語の韻脚（foot）は原則（例外あり）<sup>16</sup>、CVC また、CVCV であり<sup>17</sup>、CVC ならその母音に、CVCV の場合、韻脚の主要部（head）は第二音節になり、アクセントは第二音節に置かれる。すなわち、アイヌ語の韻脚の基本パタンは、弱強脚（iambic foot）である<sup>18</sup>。

iii) 語のアクセントを決定するのは、語頭に位置する主要部韻脚であるが、主要部韻脚を構成する要素のうち、主要部に i-, u- が位置する場合、韻脚の基本形に従い、CVC または CVCV のいずれかが形成されるような選択が行われる。なお、語頭に位置する主要部韻脚以外にアクセントが付与されることは原則禁止される<sup>19</sup>。

これらの規則を用いて問題の諸形式を説明すると要点は以下のようになる。

<sup>15</sup> a-（包括的一人称複数他動詞主格）、eci-（二人称複数）は韻律外的（extrametrical）であるのでこれらが付いた形式は語であってもアクセントが第三音節以降に来ることがある。興味深い現象であるが、ここではこれ以上触れない。

<sup>16</sup> CVCV という形であるにもかかわらず一部の形式は語頭に例外的なアクセントを持つ。例：réra「風」、k-úkao「私が片付ける」。このような場合は例外的に CV も韻脚をなすとしなければならない。従って、韻脚を（ ）で表示すれば、（réra）ではなく、（ré）ra であることになる。また、CV という自立語幹は単独で韻脚を形成できるので合成語の場合、みかけ上、CVCV であるのに、アクセントが第一音節にあるというアクセントの例外を引き起こす。ka「糸」、nit「串」→（ká）-nit「糸を巻く棒。ちなみに、k-úkao の形成過程はまた別に論じたいが、（ku-ú）kao→（k-ú）kao というプロセスが起きてやはり例外的な CV 韻脚が形成されていることになるであろう。

<sup>17</sup> もちろん、CVCV の後に随意的に C が付くこともあるが煩雑なので CVCV で代表させることにする。

<sup>18</sup> 従って、他に特別な事情がなければ、CVCV という形を語頭に持っている語は、（ ）で韻脚を表せば（CVCV）という韻脚をなしていることになる。韻脚主要部は弱強脚に従い、第二音節になるので、アクセントは第二音節に置かれる、と説明される。例：cise「家」→（ci-sé）。

<sup>19</sup> これらの他、接頭辞 i-「不定接辞」、ko-「～に向かって」、ku-「私が」などは特別な事情がない限りは、次の音節にアクセントを付加する、という規則も必要であるが、中心的テーマにかかわるものではないのでここに注の形で示しておくにとどめる。

(27) (=1) i-omare→(i-o) mare (韻脚形成開始)→(i-ó) mare (韻脚主要部へのアクセント予備付与)→(i-y-ó) mare (有標性制約 NO-HIATUS, 有標性制約 NO I/U-'V, 1) y 挿入, CVCV 韻脚形成, アクセントの韻脚主要部への確定付与)

まず、語頭の二音節が韻脚の形成に参与する。アイヌ語は弱強脚なので、韻脚の主要部である第二要素にアクセントが付与される。有標性制約に違反するので、y が挿入されて CVCV 韻脚が形成される。

(28) (=11) ku-i-ruska→(ku-i)-ruska (韻脚形成開始)→(ku-i)-ruska (韻脚主要部へのアクセント予備付与)<sup>20</sup>→(kú-y)-ruska (有標性制約 NO-HIATUS, 有標性制約 NO VI/UC, 4) y わたり音化, CVC 韻脚形成, アクセントの音節主音への移動, 確定)

最初の部分は共通である。この場合、直後が子音なので、CVCV 韻脚形成の動機がなく、CVC 韻脚が形成される。

<sup>20</sup> この段階でのアクセント付与は規則をいたずらに複雑化するだけ、という批判を招きかねず、妥当性が問題になることは承知している。しかし、あえてここで早い段階からアクセントが付与されている、と仮定したのには理由がある。o'ika「越える」は、4) の y わたり音化規則の例外で、\*oyka にならない。これは、接頭辞 o- が接合する語幹 ika「越える」が語頭に例外的なアクセントを初めから持っていることによると考えられる。アイヌ語において単語アクセントの最終決定権を持っているのは最終的な主要部韻脚の形であって、構成素の潜在的なアクセントが分節音の実現に大きな影響を与える事例は他に知られていないと思われるので通常は捨象して扱うことができと思われる。しかし、理論的には潜在的なアクセントが初めから存在している、と考えるべき理由があると言える。従って、厳密には、\*ku-ko-i-omare という連続は、潜在的なアクセントも含めて表せば \*ku-kó-i-ómáre という情報を含んでいることになる。しかしながら、これらのアクセント情報はあくまでも潜在的なもので、o'ika のような特別な場合を除けば参照されない、とここでは考えておくが、引き続き検討課題としたい。ちなみに、o-ipe「～で (o-) 食べる (ipé)」は CVC 韻脚を形成して(ó-y)pe となるが、o-ika「～で (o-) 越える (ika)」は同じ oi という連続を含むのに CVCV 韻脚を形成して(o'i)ka となる。

(29) (=7) ku-i-omare→(ku-i)-omare (韻脚形成開始)→(ku-i)-omare (韻脚主要部へのアクセント付与)→(ku-y-ó)-mare (有標性制約 NO-HIATUS, CVCV 韻脚形成, アクセントの韻脚主要部への移動, 確定)

この場合、当初の条件では (ku-i) の後ろが母音 o であるため、そのまま適性な CVCV 韻脚を形成することができない。狭母音 i の特性から、わたり音 y に子音化して後続の o と音節を再構成し、CVCV 韻脚を形成する。アクセントは韻脚の主要部である第二音節に付与される。

(30) (=13) ku-ko-i-omare→(ku-ko)-i-omare (韻脚形成開始)→(ku-kó)-i-omare (韻脚主要部へのアクセント予備付与)→(ku-kó)-i-y-omare (CVCV 韻脚形成, 有標性規則 NO-HIATUS の回避のための 1) y 挿入)→(ku-kóy)-y-omare (有標性制約 NO-HIATUS, NO VI/UC の回避のための 4) y わたり音化, アクセント確定付与)

以上から疑問に思われるのは、iyomare のような y 挿入が行われる「前」に、基底的アクセントを持っている ku-i-omare の i が y になって、次の o と再音節化 resyllabification して、(kuyó) mare となる、としなければならない、という理由は何なのか、という点であろう。先に y 挿入が起きると、ku-iyomare→kuyyomare という形ができてしまうはずだが、実際には、ku-y-omare となる。\*kuyyomare でも母音連続は回避されているので、アイヌ語の形式として、音韻的に不都合な点は必ずしもないはずなのに、この形式は選択されないのである。この場合、母音連続を避ける、という有標性制約よりも、母音 o が後続する、という環境において、初めから与えられた韻脚の材料(ku-i)を必ず用いつつ、さらに「韻脚を最適正に形成する」というプロセスが優先されなければならない、ということを意味している。

以上から言えることは、アイヌ語の音韻現象を最適性理論で説明する場合、これまで設定した有標性制約、照合性制約のみでは不十分で、適正な韻脚形成の制約の順位を最優先に設定して全体を見直す必要がある、ということ

ある。仮に、このような制約を、g. NON INITIAL という名称で呼ぶことにする。すなわち、アクセント付与がなされる語頭の主要部韻脚で起きる音韻現象が、語頭の主要部韻脚以外の場所でも起こってしまうことを阻止する制約である。i が y わたり音化を起こして次の母音と音節をなすのは韻脚形成時にアクセントを有する場合だけであるから、語頭韻脚以外で i が y わたり音化を起こして次の母音と音節をなしている形は、アクセントが初頭韻脚以外に置かれることを認めることになるので、この制約に違反することになる、ということである（下記の表）<sup>21</sup>

正しい選択の例：ku-ko-i-omare→ku-kó-y-y-omare

| ku-ko-i-omare    | NON INITIAL | NO HIATUS | NO I/U- ' V | NO C ' V | NO VI/U C | DEP | MAX |
|------------------|-------------|-----------|-------------|----------|-----------|-----|-----|
| ku-ko-i-omare    |             | *         |             |          |           |     |     |
| ku-ko-'i-'o-mare |             |           | *           |          |           | *   |     |
| ku-ko-y-'omare   |             |           |             | *        |           | *   | *   |
| ku-ko-'i-y-omare |             |           |             |          | *         | *   |     |
| ku-kó-y-omare    | ! *         |           |             |          |           |     | *   |
| ku-kó-y-y-omare  |             |           |             |          |           | *   | *   |

i に潜在的なアクセントがある場合にはわたり音化し、ない場合はわたり音化しない、というのは、記述としては誤りとは言えないが、説明になって

<sup>21</sup> しかし場当たりので遠回りな説明であることは否めないように思う。さらなる一般化が必要であることは確かなので、今後の課題としたい。

いない。通常は、アクセントのあるべき音節がわたり音化（弱化）を被る、というのは、矛盾した説明と言わざるをえないからである。アクセントが置かれるべきであるのに、弱化する、ということを説明するためには、アクセントが置かれるべき、問題となる *i* が、語全体のアクセントを決定する韻律的な主要部 (head) に含まれている、ということが重要なのである。つまり、適切な韻脚の形成、ということが、アクセントが置かれるべき狭母音の弱化、という、本来は有標的、とみられる事態よりも優先される、ということなのである。

#### 4. おわりに

以上、ごく初歩的なレベルではあるが最適性理論によりアイヌ語のわたり音挿入、わたり音化の現象を整理し、韻脚 (foot) を説明に組み込むことの重要性を指摘した。

語頭以外でも部分的に韻脚が作用すると考え、(30) では語頭韻脚が形成された後、規則の循環適用によって、今度は第二韻脚が語頭韻脚と同じ扱い（ただし、主アクセントが関わる規則は除く）を受ける、と考えるべき余地もある。今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 服部四郎（編）（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店。  
 服部四郎（1967）「アイヌ語の音韻構造とアクセント」『音声の研究』13：207-223。  
 西原哲雄・那須川訓也（編）（2005）『音韻理論ハンドブック』東京：英宝社。  
 アラン・プリンス、ポール・スモレンスキー（深澤はるか訳）（2008）『最適性理論：生成文法における制約相互作用』東京：岩波書店。  
 Sato Tomomi (2003) Phonological status of the epenthetic glides in the Chitose dialect of Ainu. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』9：11-34。  
 佐藤知己（2008）『アイヌ語文法の基礎』東京：大学書林。  
 佐藤知己（2015）「アイヌ語の合成語のアクセント規則とその例外について」アンナ・ブガ

アイヌ語千歳方言におけるわたり音化とわたり音挿入について

- エワ、長崎郁（編）『アイヌ語研究の諸問題』1-13. 札幌：北海道出版企画センター.
- 佐藤知己（2016）「言語史の研究方法与アイヌ語史の諸問題」『歴史言語学』5：79-89.
- Sato Tomomi (forthcoming) Noun incorporation in Ainu. Anna Bugaeva (ed.) *Handbook of the Ainu language*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 白石英才（1998）「アイヌ語高母音の半母音化とわたり音挿入」『千葉大学ユーラシア言語文化論叢』1：196-221.

Abstract

Glide Formations and Glide Insertions in the Chitose Dialect of Ainu

Tomomi Sato

This paper deals with glide formations and glide insertions in Chitose dialect of Ainu. The results are represented as the table below. For example, *ku-ko-i-omare* 'I pour liquor for someone' should be realized as *ku-ko-y-y-omare* by referring to the constraints based on the Optimality Theory like these:

Faithfulness Constraints

- a. DEP (DEPENDENCE) (no addition),
- b. MAX (MAXIMALITY) (no deletion or reduction),

Markedness Constraints:

- c. NO HIATUS (prohibition of vowel sequence),
- d. NO {L/U-}' V (prohibition of *i*- [indefinite]/*u*- [reciprocal] + ' [glottal phoneme] + V),
- e. NO C ' V (prohibition of C + ' + V),
- f. NO VI/U C (prohibition of *i/u* vowels between V and C)
- g. NON INITIAL (prohibition of an initial-foot phonological process in a non-initial foot position).

By applying these constraints we can choose the correct form *ku-kô-y-y-omare*. It should be noted that in Ainu the notion of foot is the most important in determining the phonological shape of a word. To capture this, here I assume constraint NON INITIAL in the highest ranking position in the markedness hierarchy.

アイヌ語千歳方言におけるわたり音化とわたり音挿入について

\**ku-ko-i-omare* → *ku-ko-y-y-omare*

| ku-ko-i-omare                     | NON<br>INITIAL | NO<br>HIATUS | NO<br>I/U- ' V | NO<br>C ' V | NO<br>VI/U C | DEP | MAX |
|-----------------------------------|----------------|--------------|----------------|-------------|--------------|-----|-----|
| ku-ko-i-omare                     |                | *            |                |             |              |     |     |
| ku-ko-'i-'-o-mare                 |                |              | *              |             |              | *   |     |
| ku-ko-y-'-omare                   |                |              |                | *           |              | *   | *   |
| ku-ko-'i-y-omare                  |                |              |                |             | *            | *   |     |
| ku-ko-y-omare                     | !*             |              |                |             |              |     | *   |
| <del>ku-ko-</del> ku-ko-y-y-omare |                |              |                |             |              | *   | *   |